はじめよう！楽しもう！農業体験

第2章
農業者向けマニュアル

農業の価値を多くの人に伝えよう

農業体験は、田植えや稲刈り、乳しぼりなど、「作業」を行うことが目的ではありません。農場や牧場に来た人に、農業がもつ様々な「価値」を伝えることが、農業体験のもつ本来の意味です。ですから、作業ばかりを重要視して、たとえ体験メニューを充実させたとしても、それは全く別のものになってしまいます。農業者が日々目の前にしている農業のすばらしさ、旬のおいしさ、自然の恵み、いのちのつながりなどを、体験を通じて、農業を知らない多くの人にも感じてもらうことが最大の目的です。

体験を通して伝えたいことを考えましょう

農業体験を計画する教員は、体験を通じて子どもたちに何を学ぶのか、目的を明確にもつことが大切です。それと同様に、農業者自身もそこで何を伝えたいのか、しっかりと自分の意見をもつことが大切です。そして、事前に教員とよく話し合い、細かい打合せをして本番に望みます。教員を、体験に来た「お客さま」にしてはいけません。一緒に考え、疑問があればそのままにしないで、一つずつ解決していくことが成功につながります。

体験を受け入れ続けるのは、簡単なことではありません

特に、大勢の子どもが一度にやってくると、事前の準備も当日の指導もあわただしく、家族で対応に追われます。それでも、子どもたちが泥だらけになって稲を植え、用水路のカエルを見つけて歓声をあげ、日に焼けた笑顔で別れのあいさつをしてくれると、実施してよかったと感じることでしょう。また、農業者が常に「指導する側」なわけではありません。子どもたちや教員から、または協力してくれるサポーターや地域の人々から、学ぶこともたくさんあります。

ぜひ、農業という仕事に誇りをもち、多くの人にその価値を伝えましょう

そのことが、子どもたちの人生を豊かにし、地域の食を豊かにし、私たちの食卓を守ることにつながります。とは言え、これから初めて農業体験を受け入れようと考えると、一人では大変なことがたくさんあります。先ずは家族の理解と協力を得ることが第一です。そして、市町村や関係機関のサポートなどを受けながら、楽しく、無理なく、できることから始めてみてください。

修学旅行で農業体験

2010年6月29日　三田村雅人さんのブログ「田舎がおもしろい」より

修学旅行などで農業体験をする学校が増えている。今日は関西の高校生がやってきた。地域の農家30軒以上、4、5人ずつ分散して受け入れました。体験は花豆の支柱立て。とても素直な子たち。関西弁でおしゃべりしながらも、てきぱきと作業を進めくれてとても助かりました。ありがとう。みんな初めての北海道だということです。私たちは「そらちDEい～ね」という農家など400軒以上のネットワークで体験学習を受け入れています。作業をするというよりは交流がメーン。長い人生の中では瞬間の出会いですが、気持ちが伝わるのはなぜなのだろう。人々が耕し続けてきた畑の上って何かが違うのでしょうね。もっともっと受入れの仲間が増えてほしいと思っています。

教科と関連付けた効果的な体験活動―どう取り組む？

～北の大地の誇れる産業「酪農」を活用して～

2012年1月14日　講師を務めた廣瀬文彦さん（広瀬牧場）のお話より

30年近く前の話ですが、東京の男の子から電話があり、「コーヒー牛乳って牛にコーヒー飲ませたら出てくるの？」と言うのです。最初いたずら電話かと思いましたが、その子は授業で牛乳をテーマにした勉強をして、友達とそんな話になったのではないかと思います。都会なので周りに酪農家がいるわけでもなく、正確な解答を出してくれる人もいなかったので、先生が北海道は酪農が盛んだから酪農家に聞いてみようということで、私のところに連絡がきたようです。

その子に「君が赤ちゃんのころ、お母さんのおっぱい飲んで育ったよね？」と聞くと「覚えてない」と言うのです。困ったなと思いましたが、「妹がお母さんのおっぱい飲んでいるのは見たことある」と言うので、「じゃあお母さんがコーヒー飲んだらコーヒー牛乳が出てくると思う？」と聞くと「出ないと思う」とはっきり言うのです。「じゃあ牛もそうだと思う？」と聞くと「分からない」というのです。これは、牛乳が何なのか？ということが子どもたちはよく分かっていないということに私が気付いた瞬間です。

自分にも子どもができて、小学生になったころ、PTAで学校の集まりに行くと、帯広という農業の盛んな地域でさえ、牛は赤ちゃんを産まなくてもお乳が出ると思っているお母さんがいたり、牧草畑とはただの原っぱだろうと思っている人がいました。日本は文明社会だし、専門的なことをやっていればそれ相応の対価がもらえて生活ができると思っていました。知らないことというのではなくて、自ら伝えていかなくてはならないのではと思い始めたのがきっかけで、酪農教育ファームの活動を始めたわけです。